

2B
2C
2D
2E
2F
2G
2H
2I
2J
2K
2L
2M
2N
2O
2P
2Q
2R
2S
2T
2U
2V
2W
2X
2Y
2Z
3A
3B
3C
3D
3E
3F
3G
3H
3I
3J
3K
3L
3M
3N
3O
3P
3Q
3R
3S
3T
3U
3V
3W
3X
3Y
3Z
4A
4B
4C
4D
4E
4F
4G
4H
4I
4J
4K
4L
4M
4N
4O
4P
4Q
4R
4S
4T
4U
4V
4W
4X
4Y
4Z
5A
5B
5C
5D
5E
5F
5G
5H
5I
5J
5K
5L
5M
5N
5O
5P
5Q
5R
5S
5T
5U
5V
5W
5X
5Y
5Z
6A
6B
6C
6D
6E
6F
6G
6H
6I
6J
6K
6L
6M
6N
6O
6P
6Q
6R
6S
6T
6U
6V
6W
6X
6Y
6Z
7A
7B
7C
7D
7E
7F
7G
7H
7I
7J
7K
7L
7M
7N
7O
7P
7Q
7R
7S
7T
7U
7V
7W
7X
7Y
7Z
8A
8B
8C
8D
8E
8F
8G
8H
8I
8J
8K
8L
8M
8N
8O
8P
8Q
8R
8S
8T
8U
8V
8W
8X
8Y
8Z
9A
9B
9C
9D
9E
9F
9G
9H
9I
9J
9K
9L
9M
9N
9O
9P
9Q
9R
9S
9T
9U
9V
9W
9X
9Y
9Z
0A
0B
0C
0D
0E
0F
0G
0H
0I
0J
0K
0L
0M
0N
0O
0P
0Q
0R
0S
0T
0U
0V
0W
0X
0Y
0Z

強く

とある人気実況プレイヤーの
VRMMO奮闘記

ニューゲーム!
"Tsuyokute" New Game!

3

邑上  主水

主な登場人物

ソーニャ

蘭のサポートNPC。
コンピュータとは思えないほど
気遣いができる。

学園長

「狩竜徒の学舎協会」のクランマ
スター。見た目どりの性格の
「格闘士」。

かぐや

「狩竜徒の学舎協会」の教師。
怒ると喋り方と人格が激変する
「格闘士」。

アラン

蘭が元々使っていたアバター。
人気実力ともにNo.1の「侍」として
ドラゴンズクロヌに君臨する。

アンドウ(安藤)

考えるより先に行動して
しまう猪突猛進男。
クラスは「戦士」。

ウサ(柊由佳子)

アランに憧れてゲームを
始めたというモーム種の
「侍」。

エドガー(江戸川蘭)

リアルではポッチの高校生。「アラン」
であることを隠して、クラスメイトとドラ
ゴンズクロヌをプレイすることに……

すず(二ノ宮すず)

蘭もひそかに憧れる清楚で
優しいクラスのアイドル。
クラスは「聖職者」。

メグ(佐々木恵)

すずの友人。
気が強くて男勝りな性格。
クラスは「盗賊」。

ティンバー

新しく放課後DC部に入った「魔術師」。
実は人気No.2プレイヤー「クロスエ」
のサブキャラ。

ヤマブキ(山吹)

チャラい軟派男だが、意外
と礼節をわきまえている。
クラスは「騎士」。

賽

串だんご

目次

第一章	公式大会に参加しよう！	7
第二章	敗者復活戦を突破しよう！	121
第三章	黒の影	278

第一章 公式大会に参加しよう！

その日、すべてのドラゴンズクロンヌプレイヤーに、一通のメールが届いた。

メールの送り主は「マスター」を名乗る人物。だが、その人物と面識があるプレイヤーはこの世界に存在しない。見覚えのないメールには、アカウントをハッキングするマルウェアが添付されている可能性がある。だから、見知らぬプレイヤーからのメールは、内容を確認するまでもなくゴミ箱送りになるのが常だ。しかし、マスターからのメールを削除するプレイヤーはいない。誰しもが、このメールを一年間待ち続けていたからだ。

——王冠^{クラウン}を手にするときが来た。集え^{ゴミ}ドラゴンハンターたちよ。

短い一文がしたためられたマスターからのメールが届いた瞬間、ほとんどのプレイヤーが色めき立つ。多くの人々を熱狂させる祭りの開始を告げる狼煙^{のぶし}であり、眠れない戦いが始まる合図でもある、そのメール。

それは、ドラゴンズクロンヌのナンバーワン“クラン”を決める壮絶な戦い——年に一回開催さ

れるプレイヤー同士が戦う公式大会、「The King of Dragons」開催の告知だった。

「……はあ」

気だるくもあり、心地よくもある春陽の季節。あと一週間もすれば春休みに入るという時期にもかかわらず、学校の廊下の窓から春空を見上げる江戸川蘭の表情は曇っていた。

彼をメランコリックにさせているのはほかでもない、先日メールで告知があったドラゴンズクロノ公式大会「The King of Dragons」の存在だった。

The King of Dragons——通称KODは、今年で八回目を数えるイベントで、その規模はグランドミッションなどと比べものにならないくらい大きい。参加条件は、どこかのクランに所属しているプレイヤーであり、七人のチームであることだけ。

だが、KODの参加者チームが毎回数百チームまで膨れ上がるのは、参加条件が厳しくないからというわけではない。KODは優勝したクランに相当額の賞金——リアルマネーが与えられるのだ。「見たかよ、江戸川！ 賞金だぜ、賞金！」

春のまどろみを吹き飛ばすほどの声が、蘭の鼓膜を揺らした。声の主は、宝くじでも当たったかのようにハイテンションな坊主頭の男子、安藤だ。

「参加条件はクランに所属していることだから……えーっと、俺たち参加条件満たしてるよな？」

「参加することはできる。けど、キツいと思う」

このやりとりは何度目だろう、と蘭は辟易する。

今日、安藤は登校してきてから、ずっとこの調子なのだ。

「いやいや、大丈夫だろ。なんつっても、俺らのクランには江戸川がいるんだからよ」
「だから、そんな甘くないって」

今回は、大きめのため息も添えてやった蘭。だが、スマホでKODの情報を集めているらしい安藤は気にする様子もなく、満面の笑みでしきりにスワイプを繰り返している。

無知ゆえの勇ましさともいうのだろうか。すでに優勝気分な安藤に、実情をこと細かく説明してやろうかと思った蘭だったが、めんどくさくなつてとりあえず大あくびを投げつけてやった。

「どーでもいいけど、なんでそんな眠そうなのわけ？」

「お前がそれを聞くか」

今日の蘭は、いつも以上に寝不足だった。目の前にいる安藤のせいだ。

以前に増してエドガーとアランの「二足のわらじ生活」は深刻な睡眠不足を生んでいた。なぜかあのラミレジイや放課後DC部のメンバー、特に安藤や山吹に狩りに誘われることが多くなったからだ。昨晩も女子メンバーがログアウトした後、半ば強引に安藤と山吹のレベル上げに遅くまで付き合わされるハメになった。

せめて一時限目が始まるまで仮眠しようと思っていたが、朝一番、こうやって「連レション」に連行されてしまい、諦めざるを得なかったのだ。

「まあ、いいや。それより、ゲームでお金もらえるなんて最高だよな。優勝したら俺にもスポンサーが付くんじゃね？」

「まあ、優勝できたら可能性はあると思う。実際、去年も優勝したチームから何人か、企業と契約を結んでプロになってるからな」

「まじで!? うおお、マジ期待大じゃん! プロになったらもう勉強しなくていいし、俺もアランみたいに豪遊できるってことだろ!？」

「あゝ、うるせえ!」

豪遊なんかしてない、とあやうく突っ込みそうになった蘭を遮り、安藤に怒号を飛ばしたのは、トイレから出てきた不機嫌そうな山吹だった。

「お前さ、声でかすぎ。ウンコが引っ込んだらだろ」

「ンだよ。これが興奮せずにいられるかよ」

「あと言っとくけど、女子からチョコのひとつも貰えないお前に、金出すトコなんてねえって」

「……ッ! てめッ!」

先日のバレンタインのことを言っているのか、ニヤケる山吹とは対照的に、痛いところを突かれた安藤の表情は渋い。

そういえば、安藤が妙に絡みはじめたのはあのバレンタイン以降だ。もしかすると、自分のことを同じ「チョコ獲得ゼロの仲間」と見ているのかもしれない。

そんなもので仲間意識を持たれても、非常に不愉快なのが。

「んまあ、賞金出る大会って聞いて、色めき立つ気持ちはわかるけどな。逆に興味なさすぎる江戸川が不思議だわ」

「……え? 俺?」

不意に話を振られ、ぎょつとしてしまう蘭。

「いや、興味ない、ってわけじゃないんだけど」

「あ、わかった。お前ジビってんだろ。なにせあのアランですら優勝できてない大会らしいからな」

どこでそんな情報を手に入れたのか、そんなことを言う安藤に、蘭はぴくりと反応してしまった。

確かに安藤が言うとおおり、アランでKODを優勝した経験がないのは事実だ。まだDICEとス

ボンサー契約を結ぶ前、一時期所属していたクロノのクラン「Grave Carpenters」で第五回の大会

に参加したが、準優勝という結果に終わっている。

なぜ決勝戦で負けてしまったのか。それは、KODが個人戦ではなく、チーム戦だからだ。

「ジビってるわけじゃない。それに、アランが優勝できなかったのにも理由がある。KODはチームで戦う大会だ。突出した才能を持っているプレイヤーがひとりいても、どうにもならない」

負ければ終わりの一回限りの戦いでは、プレイヤースキル以上に運の要素が大きくなる。

「ジャイアントキリング」なんて言葉があるように、初心者か熟練者を破るなんて話は枚挙に暇がない。その運を呼び込むために重要なのが「やりこみ」だ。やりこむことで、自信が付き、予想外のことが起きても冷静に判断することができる。

チーム戦で勝ち抜くには、メンバー全員のやりこみが必須になる。アランが準決勝で負けてし

まったのは、運を呼び込むほどのやりこみがチーム全体に足りなかったからだ。

「優勝を狙うには、相当のやりこみが必要だ。私生活を半ば捨てる、レベルを上げたり装備を整えることになる。そんなのクランのルールに背くだろう」

「う……確かにそうだな」

放課後DC部のルール。それは、ログインを強制したり、ノルマを課すことなく、純粋に「ゲームを楽しむこと」だ。

「まあ、クランのルールとかを考えると優勝は無理だろうけど、参加してみるのはいいと思うけど？ 予選突破でゲーム内通貨の賞金が出るみたいだし」

毎年、熟練者だけではなく、初心者など対人戦に自信がないプレイヤーも多く参加している理由が、山吹の言うそれだった。

「まあ、予選突破を目指すのはいいと思うけど」

「なんだよ、江戸川。もしかして、予選突破も難しいとか言うつもりじゃねえだろうな」

これ以上絶望させるな、と言いたげな安藤。

「残念だけど、簡単じゃない。予選はPvP (Player versus Player) じゃなくて、チームメンバーが獲得した総合DPで決まるんだ」

「総合DP？」

聞き慣れない名前なのか、山吹が首を傾げる。

「えーと……ドラゴンポイントの略称。予選期間中、特定のMobを倒すともらえるポイントだ。」

DPは個人ごとに計測されて、七人の合計DPで順位が決まる」

「えーと……つまり、どういうことだ？」

どうやら安藤は理解できなかったらしい。

「つまり、予選は制限時間内でどれだけ多くのMobを狩れるかを競争するってこと。プレイヤースキルがなくても、熟練者に勝てるかもしれないのが予選なんだ」

時間があるプレイヤーであれば、十分予選上位に食い込むことができる。予選に必要なのは、プレイヤースキルではなく、毎日ログインしてMobを狩り続けることができる忍耐力と時間。つまり、予選で最も有利なのは、昼夜問わずログインしているような廃人プレイヤーだった。

「それに、予選は単純に量を倒せばいいというわけじゃない。一般的にはMobレベルと獲得DPは比例するから、期間中どれだけ効率的に高レベルのMobを狩れるかという作戦が必要になる」

「なるほど。行き当たりばったりはダメっつーことか」

そういうことが一番苦手そうな安藤が顔をしかめる。

「そのDPランキングで上位100チームまでが予選突破。総当たり戦のグループトーナメントに進める」

「100チーム……って多いのか？」

「去年の参加チームは、大体700チーム前後だったと思う」

数字を聞いて、安藤もようやく予選突破の難しさを理解したのか、難しい顔で閉口する。先程までのテンションはなりをひそめ、なんとも言いがたい沈黙が廊下に漂いはじめた。誰かの口から

「やめた方がいいんじゃないか」という話が出てこなかったのは、タイミングを見計らったかのよう
うにチャイムの音が鳴ったからだろう。

「……とりあえず教室に戻ろう。ホームルームが始まる。参加するかどうかは、すぐさんたちに話
してから決めよう」

「んだな。俺たちだけで盛り上がりつつも仕方がねえか。つかさ」

スマホをポケットに押し込みながら、あくびをこぼした安藤が、潤んだ瞳を蘭へと向けた。

「なんだかんだ言っつて、めっちゃ詳しいのな。興味あるのかないのかわかんねえヤツ」

「だ、だから、興味がないわけじゃないって言っつてるだろ」

とは言うものの、参加したくないというのが、蘭の本音だった。

予選突破の確率は、低いとはいえない不可能ではない。もし万が一、予選を突破してグループプ
トーナメントに進みでもしたら、エドガーの姿を公にさらすことになる。そうならば、クロシエが言っ
ていた「エドガーを囲い込もうとしている企業たち」が食指を伸ばしてくるだろう。

また、アランでプレイする時間がなくなってしまう。このタイミングでそれは非常にまずい。

「ま、メグさんあたりが『ガチはやだ』って拒否することもあるしな」

「ありえる。メグさんああ見えて意外と肝が細かったりするからな」

「肝が細い、ね……」

メグのどこを見たらそういう意見が出てくるのか、と蘭は呆気にとられつつも、それが本当であ
るならば是非とも参加拒否してほしいと願った。

うらうらとした春の陽射しが差し込む人気がない廊下。夢の世界に誘う睡魔があちらこちらで手
招きしているような錯覚に襲われてしまう。とりあえずKOD参加うんぬんよりも、まずは一時限
目をどうやって乗り切るかが切実な問題だ――

「予選突破のキーポイントは、一週間の期間のうち、偶数日に現れる『ボーンズMob』っていう
のを狩ることらしいんだよね。手に入るDPが高いみたいで、その情報をいち早く手に入れるのが
ミソなんだって」

目を爛々とさせたメグから、突拍子もなくそんなことを言われたのは、強烈な睡魔に襲われつつ
もなんとか突破できた一時限目の休み時間だった。

「えーつと……」

睡魔で頭の回転が鈍っていることもあってか、蘭は教科書を片手にしばらく固まってしまった。
メグが口しているのは、いかにしてKODの予選上位に食い込むかという話だ。そのことは、K
ODに参加したことがある蘭にもわかる。わからないのは、なぜメグがそのことを知っていて、ど
うして嬉しそうに自分に語りかけてきているのかということだ。

「前回の予選突破ラインは二〇万DPらしいから、学校終わって毎日やればイケる可能性あると思
うんだよね、アタシ」

「どう思う？」と言いたげに身を乗り出してくるメグに、蘭は咄嗟とつさに身を引いてしまった。助けを求めるように、後ろの席の安藤へと視線を送ったが、苦笑いを返してくるだけだ。

「あ、あのさ、メグさん。それってKODの話だよね？」

「ん？ そだけど？」

きよんとした表情を返してくるメグ。

「なんでもいいなりKODの話が？」

「なんでてって……KODに参加するんだから、調べもするでしょ」

「……ん？ ん？ ちょっと待って。いつの間にそんな話になったのかな？」

さも当然のようにさらりと言い放ったメグ。思わず蘭はおかしな口調になってしまった。

嫌な予感が蘭を襲う。これはもしかして、すでに参加する方向で動いてますけどなにか……ってやつではないのか。

どこで手に入れたのか、「KODのすべて」と表紙に書かれたゲーム雑誌を鞆かぼんから取り出し、レギュレーションについて安藤に語りはじめたメグを見ながら、蘭はそう思った。

「なんだかごめんね。昨日大会の告知、来たでしょ？ そしたらメグ、絶対参加しようって張り切っちゃって」

「……ああ、そういうこと」

さすが言うには、メグは昨晚ログアウトした後、KODに関する情報をネットであさったという。そして一通り情報を仕入れたあと、深夜にもかかわらず「参加しよう！」と電話をかけてきたら

し。

「参加するってなると、ゲームプレイを強制することになっちゃうし、よくないよって言ったんだけど、ほら、メグって聞かないから」

「確かに」

そこはすんなり納得できる。しかし、この流れは蘭にとってあまりいいものではなかった。メグがKODに興味を持ったということは、安藤や山吹とあわせて、クランメンバーの半分が賛成ということになる。

「すずさんはどう？ その……参加したい？」

「強制的じゃなくて、できる範囲で頑張がんばるって感じだったら参加したい……かな？」

「できる範囲？」

「うん。クランのルールは曲げたくないし、ほら、もうすぐ春休みでしょ？ 家の事情とかある人いるだろうし」

——家の事情。

すずのその言葉で蘭の脳裏に浮かんだのは、抱えていた悩みを解決できる可能性がある、ひとつのアイデアだった。

「なるほど、その手があったか」

「え？ その手？」

時間が取れないのであれば、理由をつけて作ればいいのだ。つまり、「春休みに家族と祖父母の

家に帰省することになった」と説明すれば、アランでプレイする時間ができる。春休みまでエドガーで皆とKODに参加し、春休みに入ったらアランでプレイする。そうすればすべては解決だ。

「よし、皆さんもその気なら、KODに参加する方向でいこう」

「お！ やつと乗る気になったか！」

安藤が背後からずいとい身を乗り出してくる。

「予選突破も難しいかもしんねえけど、頑張ろうぜ！」

「ただし、KODに本当に参加するかどうかは、ウサにも確認した上で、だ」

ウサの性格からすると自ら参加したいと言いつけ出すはずなので、確認は必要ないだろうが。

「あ、ちよい待ち」

ふいに蘭の机の上にスマホが置かれた。窓際ですつとそれを見ていた山吹のものだ。

「どうした？」

「これ、参加レギュレーション。メンバーはクランから選出した五名プラス、補欠の二人、計七名で参加して書いてるけど、俺らのクラン……六人しかいねえよな？」

「……あ」

全員が同時に、うめき声のような言葉を発した。

KODは「予選」、「グループトーナメント」、「決勝トーナメント」と長い時間をかけて開催される大会のため、日をまたいで行われる。そのため、登録したメンバーが出られなくなってしまったときを考慮して、二名の補欠が必須なのだ。

重苦しい空気の中、蘭は頭を抱えてしまった。

数合わせのために、適当に知人をKODの時期だけクランに所属させるなんてことはできない。予選では補欠の二人が稼いだDPもカウントされるため、しっかりと戦力になる人間でないといけない。今からクランに合流してともに予選を戦うとなれば、候補として挙がるのは、すぐに連携がとれる熟練したプレイヤーだろう。前衛は山吹と安藤がいるため、ベストなのは遠距離アタッカー。弓を武器とする弓士か、あるいは――

――と、そんなことを考えていた蘭の頭に、ふととあるプレイヤーの名前が浮かんだ。

つい先日、アランでDICEの仕事をしたときにパーティを組んだプレイヤー、クロシエだ。

「なるほど、ちょうどいいか」

どういうつもりかわからないが、クロシエはあのとき、サブキャラであるティンバーを放課後DC部に入れてほしいと申し出てきた。彼女がラバスタ林地ですずとメグに攻撃を仕掛けたことがあったため、メンバーに話すタイミングを慎重に計っていたが、KODがきっかけであればすんなりいくかもしれない。

「あのさ、実はクランに参加したいって言ってる知り合いがいるんだけど」

「……え？」

最初に反応したのは安藤だ。

「マジで？ 知り合いつて、前やってたときの？」

「えーと、まあ、そんなところかな。彼女はプレイヤースキルもあるし、クラスも魔術師だから、か

なりの戦力強化になる」

「彼女？」

まるで美味しい餌を見つけた肉食獣のごとく、山吹の眉がびくりと動いた。

「彼女ってことは、女性プレイヤーか？」

「え？ ああ、ああ。そうだけだ」

「いいね！ いいよ、江戸川！ それは凄くいい！ 俺は賛成だね」

明らかに大会の話をしているときよりも興奮している山吹。いつものパターンに冷めた視線を投げつけたのは安藤とメグだ。

「……ま、この変態野郎はおいとして、俺もかまわないぜ。熟練者なら最高じゃん」

「はあ、ホントは知り合いじゃなきゃだけど、エドの知り合いなら、まあ、いいかな」

そういえば、と蘭は以前の記憶を掘り起こす。メグは、グランドミッションのときも「知っているプレイヤーじゃないとイヤだ」と言っていた。確かに、メグは案外肝が細いのかもしれない。

「よし。じゃあ、今日帰ってから顔合わせするって感じでいいかな、さすがさん？」

ウサのKOD参加意思確認と、ティンバーの顔合わせ。一緒にできるならちよっどいい。現れるのがティンバーなのは、向こうに行つてから改めて説明しておく必要があるかもしれないが。

「……さすがさん？」

蘭の目に映つたのは、指を顎にあてがい、天井を見上げて、なにやら考えているはず。

「おーい。すず〜」

「……え？ あ」

メグの声に、すずはようやく我に返つた。

「どした？」

「ごめん、なんでもない。それじゃあ放課後集まろう。ウサさんには私が連絡しておくから」

慌てて笑顔を見せるすずに、蘭たちは顔を見合わせてしまった。

何か気になることがあつたのだからか、と訊ねようと思つた蘭だったが、二時限目の開始を知らせるチャイムによつて妨害されてしまった。

慌ただしくなる教室の空気に乗つて、すずたちが席へと戻つていく。さっきのすずの様子が一ひかかる蘭だったが、すぐに残りの授業を突破するためにどう睡魔と戦うかへと思考がシフトする。

そして、二時限目の英語の教師が教室へ入ってきたとき――

蘭は携帯に、DICEの五十嵐からメールが届いていることに気がついた。

「ちよつとまずいことになってきている」

アランのホームハウスを訪れた五十嵐は、挨拶もそこそこにそんな言葉を口にした。

朝、五十嵐から届いたメールは、「スポンサー契約更新の件で今日会えないか」というものだった。

同じようなメールは以前五十嵐から来ていた。「アランとのスポンサー契約更新に関する不安要

素について」と題されたメールだ。アランの動画配信の数が減り、DICE内で不安の声が出てくるらしい。

「君は今日のランキングを見たか？」

「ランキングですか？ いえ、まだ見ていませんが……」

アランは手慣れた操作で、動画視聴ランキングをウインドウに表示させる。

いつもと変わらないはずの動画ランキング。だが、ランキング上位——それも長い間アランが座っていた一位の椅子に、信じられないことが起きていた。

「……嘘だろ」

ランキング一位になっていたのは、つい先日まで二位だったクロシエ。アランの名はその下——ではなく、三位まで落ちていた。

だが、この理由はアラン自身もわかっていた。エドガーとしての活動が忙しく、アランでプレイする回数が減り、覇竜ドレイク戦以降、視聴数が高い動画を配信していないからだ。

KODの参戦を渋り、アランでのプレイ時間を確保したいと考えていた理由もそれだった。

「アラン、君との間で結んだ契約に、順位に関する取り決めはない。だから会社として、ランキングが落ちたことを理由に契約更新はしない……という結論は出さないと思う。だが、社内でもより不安の声が強まりつつあるのは事実だ」

アランと五十嵐が囲むテーブルの囲炉裏にかけられた鉄瓶から、湯気が立ち上る。

サポートNPCソーニヤが淑やかに鉄瓶を囲炉裏からあげると、オブジェクト化された【白湯】

を取り出し、五十嵐に振る舞う【煎茶】を生成した。

「俺としても、社内の不安要素は払拭したいと思っている。そこで、だ」

五十嵐が何かを操作するそぶりを見せ、ウインドウを表示させた。そのウインドウに表示されていたのは、とあるウェブサイト。アランにも見覚えがある、KODのウェブサイトだ。

「君に、DICEチームメンバーとしてKODに出場してほしい」

「……DICE公式チームでKODの優勝を狙う？」

「可能なら。だが、必要なのは視聴数を稼げる動画だ。大会に参加すれば、君も動画更新がしやすくなるはず」

KODは公式の生放送チャンネルがあるが、参加しているプレイヤーのほとんどは、配信枠を購入して自分でも動画を配信する。予選はそれほど視聴数を稼げないが、決勝トーナメントにもなれば、無名プレイヤーの配信であってもかなりの視聴数を稼げるからだ。アランのKOD配信なら、一位に返り咲くほどの再生数を稼ぐことも難しくないだろう。

「ただ、これは君との契約には含まれていない依頼だ。どうするか判断は君に任せる」

五十嵐がソーニヤに会釈し、テーブルの上に置かれた湯呑みに口をつける。

KODへの出場依頼は、契約外の依頼。つまり、出場するかしないかは任意。アランのランキング低迷は痛い、DICEとしてそれ以上の面倒を見てやるつもりはないという意思表示だろう。一企業として、そういう立場を取るの当然だと思う。逆に、わざわざ提案してくれた五十嵐が珍しいのではないだろうか。その期待を裏切るわけにはいかない——

アランは、【煎茶】を口にして苦い顔をしている五十嵐を見ながらそう思った。

「わかりました、五十嵐さん。KODに出場します」

「よかった。出てくれるか」

「ただ、その……急すぎて、予選の参加が難しそうなのですが」

「それはかまわない。『予選突破要員』を六人、手配しているからな」

予選突破要員。予選でもっとも強い昼夜問わずログインしている廃人プレイヤーのことだろう。

「ありがとうございます。それに……色々心配おかけしてすみません」

「ああまったくだ。アランでログインせずになにをしているのかはあえて聞かないが、少しはプロとしての自覚を持つてほしいな」

そう言つて冗談っぽく笑つてみせる五十嵐に、アランは苦笑いで答えた。

「反省の証は大会の結果とランキング結果で」

「楽しみにしているよ。メンバーについてはまた連絡する」

「お茶をありがとう」とソーニヤにもう一度会釈し、彼が席を立った。

これからそのメンバーと打ち合わせをするそうで、五十嵐は足早にホームハウスから姿を消す。

しんと静まりかえつたホームハウス。四季をシミュレートした暖かい風が、ふわりと春の香りを居間に運んでくる。

「さて、どうするか」

渋い顔でアランは消えた五十嵐の背中を見つめていた。

KODで戦うことは問題ない。だが、ひとつ心配がある。KODに参加する方向で動いている放課後DC部だ。

五十嵐が手配しているというプレイヤーに任せれば、予選突破はたやすいだろう。ちょうど春休みに入って学校も休みになるため、グループトーナメントへ出ることもできる。

だが問題は、万が一放課後DC部が予選を突破して、グループトーナメントに進んだ場合だ。運が悪ければ、放課後DC部と同じグループで戦うなんてことになりかねない。そうなつてしまえば五十嵐の手前、彼らを完膚なきまでに叩き潰さなくてはならなくなる。

「アラン様」

と、ふわりと風に乗ってきたのは、ソーニヤの声だ。

「なにを悩んでいらつしやるのかわかりませんが、とりあえずお茶を飲んでから考えませんか？」

ソーニヤが【白湯】から【煎茶】を生成し、アランの前へと差し出す。

「お茶には灰白質を保護して、記憶力を向上させる効果があるそうです。それに玉露はストレス解消にも役立ちます」

「いや、こつちの世界にそんな効果はないと思うが」

と言いつつ、湯呑みを手取るアラン。

「気分ですよ、アラン様。気持ちの持ちようで、物事はいい方向へ進むものです」

「それは、ソーニヤの経験？」

「データベースに格納されているRAWデータを基に相関分析を行った結果です」

「……あゝ、そう」

なんだか難しい単語を羅列されたので、アランはとりあえず聞き流して【煎茶】を口にした。ソーニヤが言うとおり、ポジティブに考えていけば、そんな心配は杞憂に終わるのかもしれない。ひとまずウサにKODの件を説明して、ティンバーを皆と顔合わせさせよう。

そう思い、アランはぐいと【煎茶】を飲みほした。ストレスが解消されたのかはわからないが、とりあえずソーニヤの【煎茶】は——凄く苦かった。

放課後DC部は、ログインを強制したり、現実世界の生活、特に学業に支障をきたすようなプレイは、どのような理由であれ禁止していた。克蘭が推奨するのは、現実世界に影響を及ぼさない程度にゲームを楽しむこと。つまり、いつゲームにログインしてもいいし、いつログアウトしてもいい。ゲームの知識がなくても問題なく、気ままなゲーム生活を楽しもうというのが指針だ。

「え？ なんですか？ その格闘ゲームみたいな名前」

港街クレッシエンドのハンターズギルド前広場。これから狩りに向かうプレイヤーと、狩りから戻ってきたプレイヤーとで賑わうその場所に、ウサとエドガーたちの姿があった。

「PVPの大会。というか、ウサんところにもメール届いているはずだろ」

「えーっと……えへへ」

その笑顔から察するに、メール関係は全く見ていないのだろう。

なんとという適当なやつだ、とエドガーは呆れる。事細かく説明するまでもなく克蘭のルールを理解してくれたのはありがたいが、これほどまで適当だったとは思ってもみなかった。

「それで、その大会に参加するんですか？」

「克蘭を立ち上げてまもないし、皆で参加するのでもいいかなって。賞金も出るみたいだし」

「え、賞金？」

「すずの口から放たれた「賞金」というフレーズに、ウサの耳がわかりやすいくらいに反応した。

「賞金ってつまり、リアルマネーが貰える？」

「そういうことだ」

「うひょっ！」

今度はその大きな両目がきらきらと輝き出す。

「うわあご主人、わっかりやすくお金に釣られたなあ。目が円マークになってるよ」

ウサのコンパニオンである黒猫モモが突っ込みを入れる。

「……ッ!? な、なにを言ってる！ そんな、そんなわけあるかあ！」

「……ッ!? な、なにを言ってる！ そんな、そんなわけあるかあ！」

「それで、どうだ？ 参加することには賛成か？」

「もちろんデス！ 皆と一緒に大会に出るってなんかこう、一体感があっていいですよね！ 賞金

目当てとかじゃなく参加したいです！ 諭吉さんとか関係なくです！」

「あ、そう」

嘘くさすぎるセリフに、エドガーは冷めた視線を返す。

だが、疑うことを知らないはずは、真に受けてしまったようだった。

「よかった！ 実は、みんな参加しようって意見だったんだけど、ウサさんに聞くまで参加は保留にしてたんだ」

「まあ、聞くまでもなかった感はあるけどな」

そんなことをぼやくアンドウに、エドガーも同意してしまう。

「ただ、私、仕事があるので頻繁にログインできないかもしれないけど、大丈夫ですかね？」

「もちろん。メンバーのログインを強制しないことと、現実世界を犠牲にしない程度に楽しむのが放課後DC部のルールだから」

「ずっと思ってたんですけど、それ、すばらしいルールです！」

ウサがエドガーに向かって小さな親指をびしつと立て、にっこりと満面の笑みをこぼす。

「ところで、さ。例のクランに入りたいってヒト、もう来てンのかね？」

ヤマブキが口を挟んできた。きよろきよろと辺りを見渡し、どこか落ち着かない様子だ。

「なにそわそわしてんのさ、アンタ」

「新しいメンバーの加入だから、そりゃあそわそわするだろ。どんなヒトが来るのか」

「……アンタの頭の中って一回見てみたいのよね。多分、女だけでできてるんだらうけど」

鋭い視線で斬りつけるメグだったが、ヤマブキは全く意にも介さず、まもなく現れるであろう新

たな女性メンバーに想いを馳せているようだ。

そんなふたりのくだらないやりとりを片耳で聞いていたエドガーも周囲を見渡した。

五十嵐と話をする前、アランでログインしたときに、クロシエヘメッセージを送っていた。そろそろティンバーから、なにかしらの返答があってもおかしくない。

だが、辺りにはティンバーらしき姿はなかった。代わりに目に映ったのは、これから狩りに出るのか、楽しそうに会話に花を咲かせている戦士に、難しそうな表情でウインドウを眺めている聖職者。しかし、エドガーの視線がハンターズギルドの入り口にたどり着いたときだ――

扉の陰からこそそこそこちらを覗いている、赤いフード付きのローブを着た女性の姿が見えた。

黒い髪に褐色の肌が、より彼女の妖艶さを際立たせている女性プレイヤー。大変怪しいデーモン種の女性魔術師。間違いなく、ティンバーだ。

「……先に言っておくけど、これから来るプレイヤーには、皆かなり驚くと思う」

「驚く？ どゆコト？」

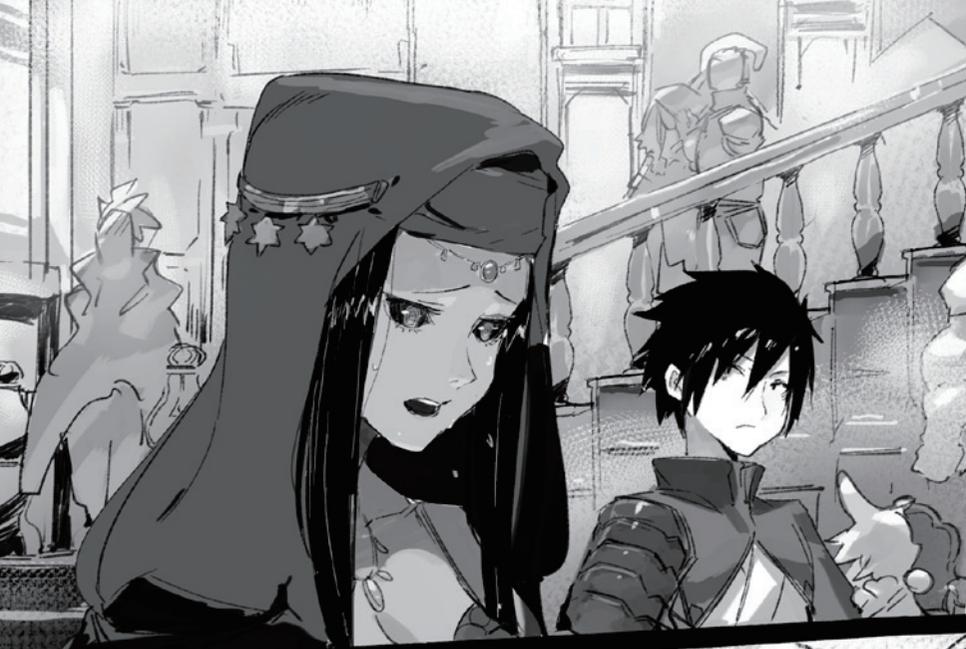
メグが頭の上にクエスチョンマークを掲げながら首を傾げた。

「説明は直接彼女にさせるよ。俺から言えるのは……彼女は悪い人間じゃないってことくらいだ」

エドガーは、あの女性に小さく手を挙げた。びくり、と身をすくめたのが遠くからでもはっきりとわかる。おっかなびっくりな雰囲気を見る限り、彼女は意外と臆病なのかもしれない。

「お、来たのか？ 驚くってことは、有名人なのか？」

「誰誰？ 誰よ？」



期待で頬がほころぶアンドウとメグ。だが、こちらに向かってくる女性の姿に気がついたとき、その表情は一瞬で強張った。

「あ、チヨー可愛い」

静寂に包まれた周囲にぼつりと浮かんだのは、にやけたヤマブキの声。
「……テイ、ティンバー……です」

気まずそうにうつむいたまま、ティンバーがかすめるような声を放つ。

「先日はとても……すまないことをした」

そして、重苦しい空気の中、謝罪の言葉を続けた。

しかし、場の空気は固まったままだった。予想していなかったプレイヤーの登場に、どう反応すればいいかわからないのか、メンバーたちの表情は動かない。

「あ、う、すまない」

「……え？ あ、ちよ、おい！」

目を白黒させ、来た道を引き返そうと、くると踵を返すティンバー。まさかそんな行動に出るとは思っていなかったエドガーは、慌てて彼女の腕を掴むのだった。

「実は、動画で君を知ったとき、俺の身体に電流が走ったんだ」



「そうか。だが私の得意魔術は炎系だ」

「これは運命だと思わないかい？ 俺たちは出会うべくして出会った」

「そうだな。私もこの魔術師という職業には出合うべくして出会ったと思う」

「障害があった方が君も燃えるはずだ」

「そのとおりだ。魔術師がソロプレイに向いていないという話を聞いて、私の心に火がついた」

プレイヤーたちで混み合っているハンターズギルドの一角。エドガーたちが座るテーブルから少し離れたところで、ティンバーとヤマブキが何やら話し込んでいる。

「まずとウサがKODの参加登録に向かっている時間で、ヤマブキはここぞとばかりにティンバーを口説きはじめた。だが、傍で聞いているエドガーが「一体何の話をしているんだ」と突っ込みたくなるほど、その会話は噛み合っていなかった。

「つかさ、あいつマジで見境なく……ってやつだよな」

エドガーと同じテーブルを囲むアンドウが、渋い顔をしている。

その表情のとおり、アンドウは機嫌がよろしくない。原因は、ティンバーを必死で落とそうとしているヤマブキ……ではなく、現れたティンバーの存在だった。

「回れ右をして去ろうとしたティンバーを引き止めた後、固まっていた場の空気がようやく和らいだのは、改めてエドガーが彼女を紹介したときだった。」

その空気によく安堵したティンバーは、ラバスタ林地で魔術を放ってしまったことをもう一度謝罪した。

そんなティンバーに優しい言葉を返したのは、被害者のひとりであるすずだ。

「すずは困惑しつつも、エドガーの知人ということでティンバーの加入を承諾する。だが、メンバーの中でアンドウとメゲは否定的だった。」

「ヤマブキの変態はどうでもいい！ それよりも、なんであいつがエドの知り合いで、それもクランに入りたがってるワケさ？」

「つかエドガー、動画見ても、知らないヤツだって言ってなかったけ？」

じろりと睨んでくるメグとアンドウに、エドガーは頭をフル回転させて言い訳を考える。

「い、いや、すずさんに動画を見せたらときは……えーと、思い出せなかったんだ。知ってたときと髪型が違ったし……ほら、やめたのはだいぶ前だろ？」

「んなの、名前わかるだろ！」

「なっ、名前を変えてたんだよ！ 前に調べたときも、プレイヤー名でヒットしなかったし」

以前、学校でティンバーの名前を検索したときにヒットしなかったのは、正体がバレないように、定期的に名前を変えているからだろう。

「彼女はレベルも高いし、プレイヤースキルもある。KODに参加するならこれ以上の援軍はないと思うぞ」

ティンバーは確かに経験豊富な熟練者だが、彼女のステータスを見て、エドガーは驚いた。サブキャラだと言っていたティンバーのレベルが予想以上に高かったからだ。

「もうひとりの私であり、ティンバーでプレイするのは心の底から楽しい」と言っていただけあつ

て、レベルだけでなく、スキルツリーもかなり上位まで育てていた。【炎系】上位魔術である【インフェルノ】は動画で見たが、その上位である【イグニス】まで取得しているあたり、かなりのやりこみだろう。

それに、彼女はメンバーに必要なだと思っていた後衛のアタッカーでもある。チームメンバーとしては最高のプレイヤーだ。

「……まあ、さ。本人は悪かったって反省してるみたいだし、許さないこともないけど」

「加入を承諾するのは、KODに参加するため、だかなな」

「どうやらその説明で、メグとアンドウも多少納得したようで、渋い表情ながらも小さく頷いた。

克蘭メンバーの中で誰かしらが異を唱えるかもしれない、というのはエドガーが事前にティンバーに話していたことだった。

プレイヤーキラー行為はゲームルールに則った行為だが、以前よっしーが行ったリアルマネートレードのような違反行為よりも、プレイヤーに憎まれることがある。

大事なクエストの途中で被害にあったり、PKによって大切なアイテムを失ったりすれば、「未だまで崇るぞ」と言わんばかりに憎悪を抱くのは当然だろう。

未遂だったとはいえ、ティンバーが行ったことはPK行為であることには変わらない。

ティンバーもそのことは理解していて、「加入を承諾してくれたのなら、皆から許してもらえるよう努力する」とメッセージで語っていた。

「それで？ ティンバーはエドのなんだったワケ？」

メグが、ぽつりと切り出した。

「噴き出さなかったのは、そういった質問に慣れてきたからだろうか。ごほん、とひとつ咳をはさみ、エドガーはメグを見据える。ツンと唇をとがらせ、「それを教えてくれたら許したげる」とでも言いたげな表情だ。

「質問の意味がわからない。彼女はただのフレンドだ」

「マジかよ」

「まっ、マジに決まってるだろ」

逆方向から放たれたアンドウの攻撃に一瞬狼狽したエドガーだったが、なんとか心を平静に保つ。ティンバーと自分は、紛れもなくただのフレンド。隠し事があるとすれば、彼女の正体が今現在、動画視聴ランキングトップのクロシエで、ともに雑誌の表紙を飾った仲だということだ。

そんなこと、口が裂けても言えないが。

「ふーん。なら、そういうことにしといたげるけど、ずずは気にしていると思うよ。そこんどこ」

「な、なせだ」

「さあね。直接せずに聞いてみたらあ？」

邪な笑みをこぼしつつ、メグは目の前にウインドウを表示させた。ハンターズギルドで購入できるドリנקメニューが書かれたウインドウだ。テーブルの上に【はちみつ酒】がすぐに現れた。

「それよりもエド。去年の予選突破ラインが二〇万DPだったのはわかったんだけど、それってどれくらいの数値なワケ？」

美味しそうに【はちみつ酒】をおおるメグ。大会について色々調べたと豪語していたが、そこまで調べなかったのだろうか。深く調べず、勢いで済ませようとするのは彼女らしいが。

「D PがもらえるM o bの中で最弱のヤツが、確か五D Pくらいだ」

さりとて言われた答えに、メグとアンドウの表情がひきつる。

「ご、五D P!? なんだそりゃ! たった五D Pを積み重ねて、二〇万D Pまでいく必要があんのか!? ひどい何匹狩んだよそれ!?」

「五D Pのやつでいくとすれば……ひとり六〇〇〇匹くらいだな」

「はあ!? なにそれ! 絶対無理でしょ!」

K O Dの予選期間は一週間。その期間で五D PのM o bを六〇〇〇匹狩るなら、ひとり一日八五〇匹程度を狩る必要がある。下校してすぐログインしたとして、プレイできるのは最大五時間ほど。単純計算だと、一〇秒で一匹倒さないと無理な数字だ。

「まあ、一匹五D Pというのは最低ラインの話だけど。もつとレベルが高いM o bは数十D P、ボスクラスのM o bだったら一〇〇D P以上になる。それに『ボーナスM o b』つても配置される」

「ボーナスM o b……そういえば、学校でメグさんがそんなこと言ってたな。なんだっけ?」

「期間が限定されているけど、取得D Pが多いM o bのこと」

メグがドヤ顔で答える。

「一週間の期間のうち、偶数日に現れるボーナスM o bをうまく狩れば、二〇万はいける数字だ」
「なるほどな。そんなモンがあるなら、いけるかもしれねえな」

「まあ、あくまで『いける可能性がある』レベルだけど」

エドガーの言葉に、再びアンドウの表情が曇った。

これまでのK O Dの歴史で、優勝候補筆頭のチームが予選であっけなく姿を消した話を、エドガーはいくつも知っていた。予選ではプレイヤースキルが勝利に直結せず、大番狂わせが普通におこるからだ。ゆえに、優勝候補チームは、補欠の二名に予選突破用の廃人プレイヤーを起用することが多い。

ちなみに毎年、予選の上位は廃人プレイヤーで構成されたチームが占めるが、彼らが陽の目を浴びることはない。昼夜問わずひたすらM o bを狩り続けるというのはとてもない労力なのだが、P V Pのような派手さに欠けるため、公式放送で流されないのだ。

「とりあえず、皆さんたちが戻ってきたら作戦考えようぜ。無理しないレベルでやるつつつても一〇〇位までに入りてえし」

「そだね。予選突破のマニラとアイテム欲しい」

そう言って、メグが再びドリンクメニューを開く。

先日のよっしー事件でまだ懐が温かいはずなのに、「一杯おごってくれ」と縋りつくアンドウがメグに頭突きを食らった。そんなふたりを見て、エドガーが冷笑したとき――

「みんな! 終わったよ!」

ハンターズギルドに、甲高い女性の声が響き渡る。

エドガーたちのもとに、すぐとお供のウサが小走りて近づいてきた。相変わらずふたりは仲がい

いようで、手を繋いでこちらに向かっている。

「……お、終わった」

エドガーの背後からどんよりと放たれたのは、魂を抜かれたかのごときヤマブキの声。死の宣告を受けたような絶望に打ちひしがれた表情に、エドガーはぎよつとしてしまった。

「な、なんだよ、どうした？」

「ガードが……固い」

「……え？」

状況がつかめないまま、しばし呆然^{ぼうぜん}としてしまうエドガー。

だが、ふとヤマブキの隣に立っていたティンバーを見て、気がついた。

ヤマブキは、ティンバーの心の天然防壁を突破することができなかったのだ。

「みなさん、KOD受付は完了しましたデスよ！ ステータス画面にKOD参加マークがついてるか確認してくださいな！」

そう言つてウサは、とあるアイテムを皆に配りはじめた。

「なにこれ？」

「それを使えば、いつでもKODの情報が見られるんだって。予選の順位とか、参加チームとか」
アンドウの問いに、さすが答える。

「へえ……あ、ほんとかだ。参加チームにアタシらの名前がある」

メグも嬉しそうな声で言った。

配られたのは、小冊子タイプの【ロスター】と呼ばれるアイテムだった。

KODの情報は、公式WEBサイトに設けられた大会専用ページで確認できるが、更新にはタイムラグがあり、生の情報は手に入らない。

そこで、参加者がリアルタイムで情報を入力できるように用意されたのが【ロスター】だった。

【ロスター】は今後の大会スケジュール、予選の順位、参加チームやクランの情報にはじまり、周囲マップのリアルタイム表示や、自身のアイテムインベントリへのショートカットなど、大会を戦う上で便利な機能が多く備わっている

「よし、これで手続きは完了だな。スタートは明日からだ」

「うん、なんだかグラウンドミッシヨンのときよりドキドキしてきた！」

エドガーの言葉を受けて、かすかに頬^ほを紅潮^{こうしやう}させる、すず。

先日のバレンタインイベントと違った本気の戦いに、エドガーも多少高ぶりを覚える。

「アンドウ、ヤマブキ、念のため言つとくけど、グラウンドミッシヨンのときみたいに暴走したら、今度こそヤバイからね？」

にこやかなすずとは対照的に、ドスの利いた声でちくりと刺すメグ。アンドウとヤマブキは言葉を発することなく、ひきつった笑みで答えた。

「とにかく！ 結果うんぬんよりも大会を楽しもう！」

「楽しんだもの勝ちですからね！ 大会って初めてだから、わりわりする！」

「よし。それじゃあ、明日からの計画を練つてから、狩り場を見に行こうか。ティンバーの歓迎も

兼ねて」

メグやすずの楽しそうな声を受けて、エドガーがそう提案した。

「あ、そうだね、簡単な歓迎会的な」

良いアイデア、と拍手を打ったすず。だが、今のティンバーは困惑顔だった。

「か、歓迎会？ わわ、わっ、私のか？」

「ティンバーさんのこと、いろいろ教えてください」

「そうです！ 師匠とどんな関係なのか、とか！」

「え？ いや、しかしだな」

すずとウサに手を引かれ、ハンターズギルドの外へと連行されていくティンバー。見知らぬ人間ばかりという状況で、空気に慣れてもらうには、半ば強引に輪に入れてやる必要がある。だが、今ティンバーを助けに行けば、あれこれと質問攻めにあい、墓穴を掘ることになりかねない――

「お、おい、エドガー、彼女たちは一体……待て、なぜ手を振っている」

困惑した表情のティンバーへ、別れの挨拶をするように、エドガーははらはらと手を振った。

そして、心の中で「がんばれ」と小さくエールを送るのだった。

「さあ、いよいよ始まった『The King of Dragons』ッ！ 参加チーム八〇〇オーバーの中で、栄

光の王冠^{クラウン}を手にするのはたった一チーム、七人だけだッ！ この壮絶な戦いを制するのはどのチームなのかッ!? KODの熱い戦いは今年もこの俺、アンドレアが熱い実況を交えてお届けするぜッ！ Check it out シー」

「……なんだこりゃ」

KOD予選一日目――

学校から帰宅し、ゲームにログインしたエドガーの視界にでかかで現れたのは、KOD開催を告げる短い告知映像だった。動画に現れたこのアンドレアというDJは、現実世界でも番組を持っているプロのDJだとか。だが、昨年こんな動画を見た記憶は、エドガーにはなかった。

今回は八回目で別に記念すべき回でもない。なぜ急にこんな動画を流すようになったのか。

「聞くところによると、今回から大会スポンサーが増えたらしい。生放送にもスポンサー企業の広告が出るだろうし、視聴者数を確保するために宣伝を出したところだろう」

そう言ったのは、ここクレッシェンドの風景がやけに似合うティンバーだ。海沿いの柵^{さく}に腰を預け、海風に漆黒^{しちく}の髪をさらさらとなびかせているその姿は、神々^{しんじやう}しさすら感じてしまう。

「なるほど。視聴者数がダメダメだったら、来年からスポンサーが減ってしまうからってわけか」

「運営にとっては大会も大事な『収入源』だからな」

ティンバーによると、あの動画はKODがはじめて最初にログインしたときにだけ流れるものらしい。去年と違い、公式サイトもKOD一色になっているようで、運営の力の入れようがわかる。「参加チーム八〇〇って、去年よりかなり増えているな」

「【ロスター】を見る限り、特に私たちのような新手的クランが増えているようだ」
「大手クランは？」

「去年と変わらな。ほとんど参加している……ほら」

ティンバーは、頬にかかると、髪を小指でかきあげると、エドガーの前に【ロスター】ウインドウを表示させた。すでに予選のランキングが更新されていて、参加チームの一覧も表示されている。

「Grave Carpentersも参加しているな」

「お前が昔所属していたクランか？」

「よく知ってるな。できれば遭遇したくないクランだな」

彼らは、メンバー全員が動画視聴ランキングの上位にいるような、プレイヤースキルに特化したクランだ。しかも、クランマスターのクローをはじめ、血の気が多い連中が多く所属している。Mob狩りをしている最中に出くわしてしまえば、問答無用で襲いかかってくるだろう。

「それよりも、これはなんだ」

ティンバーが見せたのは、「フォーチュン」と書かれたチームだった。

「……？　なんだそのチーム」

「それはこっちのセリフだ。お前はアランでも出場しているのか」

思わずどきりとしてしまったエドガーだったが、ティンバーがアランの存在を知っていることに気がつき、安堵する。そして、しばし記憶を辿った。

推測するに、フォーチュンは五十嵐が登録したチームだろう。

「色々あってな。DICEからの要望で、KODに出場することになった」

他のメンバーが気になり、チームメンバー一覧を見てみたが、やはり知らない名前ばかりだった。

「予選はどうするのだ？」

「予選は俺以外のメンバーで何とかすると考えていた。予選はこっちに集中する予定だ」

自分以外の六人は、五十嵐が手配した予選突破要員だ。あつちは任せておいて大丈夫だろう。

「そういうことか。私に一位を取られて焦っているのだな。サブキャラにかまけてメインキャラをおろそかにするから、そういうことになるのだ」

「……耳が痛いよ」

「ふふ、まあ、アランが本気を出すまで、いつときの一位を堪能させてもらうさ」

いたずらっぽく笑っているのは、半分冗談のつもりなのだろうか。

だが、三位に転落したという事実を突きつけられているエドガーにとって、それは笑い事ではない。「放課後DC部が予選突破した場合、どうするつもりなのだ？」

「ちょうど春休みで学校が休みになるし、実家への帰郷ということにして、しばらくはアランでプレイするつもりだ」

「そうなるよ、もし予選を突破したら、グループトーナメントはお前抜きで、ということか」

「そういうことだ。でも君がいてよかったよ、ティンバー」

エドガーが何を言いたいかすぐに理解できたようで、ティンバーは任せると言いたげに頷いた。グループトーナメントは五対五のチーム戦になるが、直接五人同士が戦うわけではない。専用の

フィールドで先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の順で勝ち抜き戦を行う団体戦だ。

団体戦において重要になるのが、豊富な知識を持ったリーダーの存在だ。

リーダーは各クラスの相性や弱点など、知識に裏付けされた確なアドバイスを行う役割を担う。エドガーが考える中でリーダーとして適任なのは、ティンバー以外にいなかった。

「アランの件がなかったとしても、大会ではできるだけ目立たないようにしたい。君が言っていたエドガーの正体を探っているやつらに見つかりたくないからな」

「侍狩りか」

エドガーは無言で頷いた。エドガーへのコンタクトを図っているというアパレルメーカー「Twinking」だけではなく、多くの企業の目が向けられているKODで月歩を使ってしまったら、面倒なことになるのは明白だ。

だが、【ロスター】に視線を送ったままのティンバーの表情は優れない。

「難しいか？」

「ん？ あ、いや、リーダーの件はかまわない。だが、な」

「……？ どうした？」

不穏な表情でティンバーが再び【ロスター】の画面を見せる。表示されていたのは、先程のチームリスト画面ではなく、大会のレギュレーションページだった。

「今回、参加チームが増えたためか、レギュレーションの変更がある。ここを見る」

「……敗者復活戦？」

「大会の流れ」部分、予選とグループトーナメントの間に、聞き覚えのないその名前があった。

「予選のD Pランキング一〇一位から二〇位までの二〇チームによるバトルロイヤルらしい。本選と同じく、一チーム五人で戦うようだな」

「勝利した一チームがグループトーナメントに進める、というわけか」

これは過酷だ、とエドガーは渋い表情を浮かべた。

敗者復活戦がどれくらい広いフィールドで実施されるのかはわからないが、二〇チーム、合計一〇〇人のプレイヤーが一斉にPVPを行うということだ。

戦っている最中に他のチームに襲われる、なんてことは当然のように起こるだろうし、敵味方入り乱れての乱戦になりかねない。そうなったら、プレイヤー個人のスキルなど無に等しくなる。

「もし、放課後DC部とフォーチュンが敗者復活戦に送られたら、まずいことになるな」

ティンバーの言いたいことが、エドガーにはすぐ理解できた。

予選突破というひとつの椅子を懸けて、放課後DC部と戦うことになりかねないのだ。

しかし、その可能性は低いとエドガーは考えていた。

五十嵐が手配したプレイヤーがどの程度こちらの世界に入り浸っているのかはわからないが、予選突破を確実にするために相当なプレイヤーを手配しているはず。公式配信が行われない予選敗退で終わってしまう、宣伝効果がないようなものだからだ。

「放課後DC部は敗者復活戦送りになるかもしれないが、フォーチュンは大丈夫。ティンバーが言うようなことは起きない」

「そうか。ならいいのだが」

「そう言ってティンバーが【ロスター】画面を閉じたときだ。

「ししょ〜!」

海風に乗ってエドガーのもとに運ばれてきたのは、エネルギーに満ちあふれた女子の声。まさにウサギのごとく飛び跳ねながら駆け寄ってきているウサのものだ。

「お待たせしましたッ! 師匠ッ! いよいよデスね! 賞金貰えるKOD!」

エドガーの目前で急ブレーキをかけ、ずざざと滑り込んでくるウサ。その目はこれから始まるお祭りへの期待感なのか、賞金への渴望なのか、爛々と輝いている。

「あつ、ずずさんたちログインしたみたいですよ! 私ちよつと迎えに行ってくださいませね!」

息をつく暇もなく、ウサはくるとターンすると、再び街の広場の方へ走っていった。

なんともせわしないヤツだ、とエドガーは辟易してしまう。

「ところでウサはなぜお前を師匠と呼ぶのだ? お前は这个世界で弟子を取ったのか?」

「俺に聞くな。ウサを弟子にしたつもりはないし、何かを教えているわけじゃない。以前困っているところを助けてしまったから、あの感じなんだ」

「……ふふ、なんだそれは」

ティンバーが面白そうに頬を緩ませる。

「しかし、一体なんなのだ、放課後DC部の面々は。お前との関係を細かく聞き出そうとしたり」

「ウサあたりに聞かれたのか。アランのことは話してないだろうな」

「安心しろ。それよりもだな、クランマスターはお前と私の関係がたいそう気になるそうだ」

「……なんだって?」

空耳かと思ったエドガーだったが、くつくつと肩を震わせ、忍び笑いを浮かべるティンバーを見る限り、勘違いではなさそうだった。

「お、おい、今なんて」

「ふふふ、なんとも奇妙なプレイヤーたちがいるクランだな。お前が大切にしたいと思う理由がわかったよ」

「な」

何をふざけたことを言っているんだ、と突っ込みかけたエドガーだったが、そんな反応すらティンバーを喜ばせてしまう気がして、精一杯の皮肉で答えてやることにする。

「……そうだな。突然『サブキャラを所属させてくれ』、なんて言うヤツもいるクランだしな」

どうだ、とエドガーがティンバーを横目で見る。

少しはむっとするのかと思ったのに、ティンバーは変わらず楽しそうだ。

敗北感を感じてしまったエドガーは、降参だと口にする代わりに小さくため息を漏らす。

重苦しいため息は、潮の香りを携えた海風に乗り、街の中へと通り抜けていく。

続いて、なにやら楽しそうなずとウサの声が聞こえてきた。

クレッシェンドの街の入り口に移動したエドガーたちは、パーティをふたつにわけることにした。昨日余った時間で、いくつかのダンジョンを下見してまわったときに、この予選を戦い抜くのいい狩り場を二カ所発見したからだ。

エドガーが考えるいい狩り場とは、現れるM o bのレベルと獲得D Pのバランスがいいこと。そして、予期せぬアクシデントでパーティメンバーが危機に陥ったとき、退路が確保できる場所であることだ。

獲得したD Pは万が一死亡しても失われることはないが、所持しているアイテムや装備は別だ。失った装備を新たに用意する時間を考慮すると、多少時間がかかっても、身の安全を確保しながらM o b狩りを行う方が、結果的に多くのD Pを稼ぐことができる。

「パーティのリーダーは、エドガーさんとティンバーさんで考えてるんだけど……どうかな？」

少し自信なげに、さすがふたつのパーティのメンバーを発表した。

ひとつめのパーティは、盾役もこなせるアンドウに、攻撃役のティンバー、メグ、そして回復役のすずというオーソドックスなパーティ。そしてふたつめのパーティは、残りのエドガー、ウサのダブル侍に、盾役のヤマブキで構成した攻撃型パーティだ。

すずが偏った構成にしたのには理由があった。ひとつめのパーティが向かう狩り場——ダンジョン「瘴気の谷」が、比較的高レベル向けのダンジョンだったため、極力戦力を集めておく必要があったのだ。またダンジョンの特性により、回復役は必須だった。

「ふむ、なかなか良い布陣だ」

驚きの声をあげたのはティンバーだ。

「瘴気の谷はその名のとおり、毒性の強い瘴気が滞留している場所もある危険なダンジョンだからな。ステータス異常を回復できずがっているのはありがたい」

「え……あ、ありがとうございます。がんばります！」

「私が言うのもなんだが、敬語は必要ない。できるなら、フランクに接してほしい」
ティンバーが少し気まずそうに笑顔を見せる。

「……うん、わかった。同じ克蘭メンバーだからね」

「ああ。はじめての狩りだが、皆、よろしくたのむ」
小さく頭を垂れるティンバーに渋々頷いたのは、まだ彼女の克蘭参加を快く思っていないメグとアンドウだ。

すずがふたりとティンバーを同じパーティにしたのは、戦力的という意味合いもあるが、早く打ち解けて欲しいという思いもあるらしい。まだきこちなさはあるが、同じゲームを楽しんでいるのだから、すずの思惑どおり、しこりはすぐに解消されるだろう。

きこちなく握手を交わしているティンバーとメグを見て、エドガーはそう思った。

「よし、それじゃあ確認！」

出発前の最終チェックだ、と言いたげにすずが元気よく号令をかける。

「皆、回復アイテムは持った？」

「持ったよ！」

びよんびよんと跳ねながらウサが答える。

「ウサさん、リーダーのエドガーくんのいいつけを守るようにね」

「はいはい！」

「俺はお前の保護者じゃねえ」

おやつは三〇〇円まで、なんて言いそうな雰囲気、エドガーはげんなりしてしまう。

ウサの背中にうつつすらと小ぶりのリュックサックが見えるのは気のせいだろうか。

「それじゃあ、出発！」

「おーっ！」

「お前はこっちだ」

勢いですずの後を追おうとしていたウサの首根っこを押さえ、エドガーはすずたちと逆の方向へと向かう。「本当に保護者みたいだな」と笑うヤマブキは無視してやった。

クレッシェンドの街を出て西へ――

エドガーたちの目的地は、クレッシェンド大平原の彼方に霞む廃城、「オークのねぐら」だ。

「ウサ、ヤマブキ、周囲警戒を怠るなよ」

「わ、わかってますってば」

「言われなくてもやってるっての」

クレッシェンドエリアにある、人間とオークとの戦いで廃棄されたクロツサス城、正式名称「オークのねぐら」。昔は絢爛豪華な鎧を身にまとった騎士たちが数多くいたというこの城は、いまやオークたちがひしめく恐ろしいダンジョンへと様変わりしている。人の手が入らず、苔に覆われ半壊している廃城型ダンジョン「オークのねぐら」は、おいしい経験値が獲得できる「オーク・ソルジャー」の狩り場として知られているダンジョンだった。

「ウサさん、今DPいくつかわかる？」

持参した【回復薬】を手のひらに塗布しながらヤマブキが訊ねた。

「ええっと……二四〇DPなので、三人で七二〇DPですね」

「ダンジョンに入って一時間……で、ひとり二四〇DP……おいしい方なのか？」

不安げなヤマブキにエドガーが頷いてみせる。

「この強さで二〇DPもらえるのはおいしい方だ。もう少し上のレベルのMobが出るすずさんの方はもっと稼げてるかもしれないが」

「瘴気の谷って、サラディン盆地にあるんですしたっけ？ 結構高いレベルのMob、出ますよね」

トラウマがあるのか、ウサの耳はぺたりとなっっている。初めて会ったとき、ウサはソロでサラディン盆地を抜けようとしていたことを、エドガーは思い出した。

「瘴気」と呼ばれる毒素を含む霧が発生する瘴気の谷は、死霊系のMobが多い。中でも、「ゲー

ル」や「バンシー」「レイス」といったM o bは、オーク・ソルジャーよりもレベルが高く強いが、その分、高DPを獲得することができる。

「聖職者のすずさんがいるし、なによりティンバーがいる。問題ないだろう」

「向こうの心配は後にしようぜ。そろそろオークが再配置する時間だ」

壁に背を預け、身を潜めながら部屋の外を見やるヤマブキ。

今エドガーたちがいる場所は、オークのねぐらの深部、その昔厨房として使われていたと思しき小さな部屋だった。

下見の際、エドガーがここを狩場を選んだのは、この部屋があったからだ。

厨房はオークが現れず、食堂につながっている扉と裏庭につながっている扉があり、オークの誘い込みと、脱出が容易なのだ。

そしてもうひとつ、厨房には別のダンジョンである「クロッサス下水道」への入り口があるため、万が一の場合、エリアチェンジで逃げることも可能だった。

「よし、じゃあまた頼むぞ、ヤマブキ」

「任せとけ。オークのやつらをここに引っ張ってきてやる」

ヤマブキの役目は、M o bのターゲットを取ることと、部屋の外に現れるオーク・ソルジャーを安全な厨房に連れてくることだった。

「気をつける。何かあったらすぐに呼べ」

「わかってるって」

ヤマブキは笑みをこぼすと厨房を後にした。

ダンジョンでのM o b狩りの方法は、パーティのレベルによって異なる。ひとつは安全な場所を拠点として、盾役のプレイヤーや遠距離攻撃ができるプレイヤーがM o bを釣ってくる「拠点狩り」。そして、単純にダンジョンを周回し、出会い頭にM o bを狩る「周回狩り」だ。

拠点狩りよりも、周回狩りの方が比較的短時間で多くの戦闘ができるため、取得する経験値は多くなる。だが、臨機応変に戦闘をする必要がある、パーティ全員のプレイヤースキルと、移動しながら回復ができる回復役の存在が必須だった。

「師匠」

と、ヤマブキが厨房を後にしてすぐ、ウサが静かに切り出した。

「私の気のせいかも、なんですが。なんだか下見に来たときよりもこのダンジョンにいるパーティ、少なくていいですか？」

先日、下見のためにオークのねぐらを訪れたときは、オーク狩りをしている「周回狩りパーティ」と何度もすれ違った。

しかし、今日はパーティの姿がない。姿がないどころか、戦闘音すら聞こえない。

予選がはじまり、オークのねぐらでは高いDPが獲得できるにもかかわらずだ。

「この前より多くても不思議じゃないのに、減るなんてあり得ないと思うんです」

「意外と鋭い洞察力を持っているんだな。俺が周囲警戒を怠るな、といった理由がそれだ」

「それ？」

「オークが現れない場所なのに、周囲警戒するのは変だと思わなかったか？」
 「ええと……はい、確かにちよつと思いました。師匠は心配性なんだな！程度にしか思つてなかつたですけど」

思わず、ぷつくりとしたウサの頬をつねりたくなつたエドガーだったが、自制する。

「俺たちが注意すべきは、オークよりも今このダンジョンにいる『とある』プレイヤーだ」

「だ、誰です？」

「レッドネームだ」

「……レッドネーム？」

ウサが小さく首を傾げ、何やら考え出す。そのまましばし黙考したウサだったが、どうやらその名前は記憶になかつたようで、笑顔をこちらへ向けてきた。

「いいか」

念を押すように、ウサの適当な記憶力に刷り込むように、エドガーはゆつくり説明する。

「レッドネームとは、頻繁にPK行為をしている危険な輩のことだ」

双方が同意した上で行われるPVPは、力を競い合う、いわば競技的な目的で行われることが多いが、PK行為の目的のほとんどが実利的なものだった。

その最たるものが相手のアイテムを奪うこと。

プレイヤーを襲い、死亡させることで、所持しているアイテムや装備をオブジェクト化させ、奪う。見知らぬプレイヤーに装備を盗まれるというのは気持ちのよいものではないが、PK行為はゲームルールに則ったロールプレイのひとつでもある。

危険なダンジョンに行くことなく装備を手に入れることができるPK行為は、良識に目をつぶればメリットが大きいと思われるが、だが、仕掛ける側にデメリットがないわけではない。

そのデメリットが、ステータス異常状態のひとつである「レッドネーム」化だった。

PK行為を一定回数以上行ったプレイヤーは、ステータス画面の名前が赤く表示されることになるのだ。これはれつきとしたステータス異常状態で、体力の自然治癒力が低下したり、アイテムの購入価格が高くなるなどの制限を受ける。

また、レッドネームへのPK行為はペナルティを受けないという特徴もある。

つまり、レッドネームはプレイヤーから執拗に狙われ続けるということだ。

「そのレッドネームがここにいるんですか？」

「ダンジョンのプレイヤーがいないのは、レッドネームによって排除されたか、彼らを恐れて別の狩場に向かったからかもしれない。もしかすると、どこかのチームがKOD予選を有利にすすめるために、レッドネームを補充として起用した可能性もある」

レッドネームはペナルティも多いが、狩場を独占するために彼らを利用する場合もある。PVPに自信がないプレイヤーが彼らを恐れ、狩場から離脱していくのだ。

「じゃあ、ここはかなり危険な場所だつてことですよね？ 移動した方がよくないですか？」
「いや、移動はしない。レッドネームがライバルたちを排除してくれているとすれば、注意するのは彼らだけだ。これほど狩りやすい場所はないだろう？」

「……そう言われれば、確かにそうですね」
もしレッドネームが襲ってきたとしても退路は確保してある。彼らの目的が狩場を確保することだとすれば、執拗しつとくに追つてくることはないだろう。

「大事なものは、いつも以上に周囲の状況に目を配っておくこと。怪しいプレイヤーを見かけたらすぐに逃げるくらいのつもりで——」

と、エドガーが言いかけたそのときだ。

「キタキタ、来たぜ！ 大漁だッ！」

突如、厨房ちゆうぼうの扉を蹴破り飛び込んだのは、ヤマブキと、彼を追いかけるオーク・ソルジャーの群れ——

同時に複数匹のMobを釣るのは、非常に難しく危険が伴うが、短時間で多くの経験値とDPが手に入る。ヤマブキが言うとおり、これはまさに大漁だ。

「用意できてんだろうな!? エドガー！ ウサさん！」

「ウサ、とりあえず今はオークに集中しよう」

「ラジャッす！」

エドガーが勢いよく刀を抜き、ウサとともにオークへと襲いかかる。

静かなダンジョンに、エドガーたちの戦闘音だけが響いた。

その後、エドガーたちはレッドネームの存在に神経を尖とがらせてつ、ひたすらオーク狩りを続けた。回復ヒール役がないパーティ編成で事故が起きる心配をしていたエドガーだったが、幸運にもそれは杞き憂ゆうに終わった。

だが——問題は別のところで起きていた。

エドガーがそのことを知ったのは、アイテムの補充にクレッシェンドの街に戻ったときだった。クレッシェンドの街でエドガーを待っていたのは、「瘴しやうき気の谷」に向かっていたはずのメグとアンドウの姿。一瞬、何があったのかわからなかったが、彼らの姿を見て即座にすべてを理解した。彼らは無装備ネイキッド——つまり、武器と防具を何も装備していない姿だった。

「……PK行為を受けた？」

「いきなりよ、いきなり。グールと戦闘しようとした瞬間、背後から襲いかかってきたわけよ！」
メグが言うには、瘴しやうき気の谷に入つてすぐにプレイヤーからの攻撃を受け、メグと盾役タンクのアンドウがやられてしまったらしい。

「師匠も感じてたみたいですけど、オークのねぐらもPKがいそうな空気でした」

「はあ!? マジで!? 何なのよ一体！」

「とにかく落ち着いてメグさん。その……とりあえず市販品でもいいから、装備を買った方がいいと、思うよ」

いつもより露出度が高い下着だけのような姿で怒るメグのどこに視線を置けばいいのかわからず、

エドガーは困惑してしまう。

「つか、アンドウがいながらなんで、メグさんまで？」

「いやね、盾役の俺が攻撃を受けている間に逃げてもらおうとしたんだけど、その……メグさんが逃げ遅れてさ」

聞き取りにくい、かすめるような声でヤマブキに説明するアンドウ。だが、メグの地獄耳はその言葉に即座に反応した。

「なくによ、アンドウ。アタシがとろいからやられちゃったって言いたいワケ？」

「い、いや、そういうわけじゃないけど、メグさん、こけちゃったから」

「ああん？ なんだって？ よく聞こえないわ、アタシ」

怒りで羞恥心しんというものが吹っ飛んでいるのか、もともとそういうものがないのかわからないが、気にする様子もなく下着姿で詰め寄るメグ。周囲のプレイヤーが哀れみの視線を送っているが、これはメグに、というよりも詰め寄られているアンドウへの哀悼あいとうの視線だろう。

「それで、ずずさんとティンバーは？」

「俺がタゲられている間に、ずずさんとティンバーは奥へ避難してもらった。たぶん、今も身を隠していると思う……ってメグさん痛い」

アンドウがメグにびしびしとスネを蹴られながら答える。街はPK行為禁止のため、痛みは感じないはずだが、心理的ダメージだろうか。

「詳しい状況はわからない？」

「わ、悪い。確認する前にやられてすぐに、エドガーたちが戻ってきたから、まだ確認していない」「ということは、あまり時間は経ってないってことか」

そして、ここにずずたちが戻ってきてきているということは、少なくともふたりは死亡していない。状況を直接本人たちに確認するために、エドガーは、クランメンバーと会話を交わすことができる「クランチャット機能」をメニューから開いた。

クランチャット機能は、発した音声が自動でテキスト化され、クランメンバーと共有することができる機能だ。メールでもメンバーとのやりとりは可能だが、クランメンバーとのコミュニケーションには、リアルタイムでやり取りができるクランチャット機能を使うことが多い。

『エドガー…ティンバー、ずずさん、状況は聞いた。今は安全な場所に？』

エドガーの声がダイレクトにテキスト化され、視界に浮かぶウインドウに表示された。わずかな時間をはさみ、返答が来る。

『ティンバー…ああ。今はずずと身を潜めている』

『ずず…ごめんね、エドガーくん。周りに高レベルのMobもいるし、身動きがとれない状況』

即座に返ってきたふたりの反応に、エドガーはとりあえずほっと胸をなでおろす。

『エドガー…無事なようでよかった。メグさんとアンドウの装備は？』

『ティンバー…私が回収した』

『メグ…ホント!? ティンバーさん、マジありがとうー！』

『アンドウ…え？ まじッスか？ 俺の装備まで!?!』

『ティンバー…お前の装備は、メグのを拾ったついでだ。放置してもよかったが、後味が悪くてな』
『アンドウ…あー、スーツスよねえ』

『メグ…かわいそうなアンドウ』

そのやりとりに、エドガーは思わず笑みを浮かべてしまった。

ティンバーの加入を快く思っていなかったふたりだが、瘴気の谷でいくらか打ち解けたのかもしれない。PKの邪魔を受けなければ、もっと打ち解けられただろう。

『エドガー…M o bがどうにかなれば脱出できそう？』

『まず…無理かも。襲ったパーティがうろついていて、とりあえず時間も時間だから、このままここでログアウトしようかって、ティンバーさんと話してた』

その返答に、エドガーはしばし考える。

解決法は限られている。ふたりでPKがうろつくダンジョンを強行突破してもらうか、彼女たちを救出しに行くかのふたつだ。どちらにしろ、時間がかかってしまう。プレイ時間が制限されているメグやずずを考えると、今日はおとなしくログアウトしてもらうべきかもしれない。

『エドガー…それがいいと思う。周囲に注意してログアウトしてくれ。ログアウト処理中に襲われたら、逃げることも反撃することもできないからな』

『ティンバー…ああ、わかっている』

そして、ティンバーから返事が届いてしばらく後、クランメンバーのリストに並ぶ、ずずとティンバーのステータスが「オフライン」へと変わった。

とりあえずは一安心だが、状況が好転したわけではない。

瘴気の谷でログアウトすれば、再びログインしたときに立っている場所は、同じ瘴気の谷だ。どちらにしろ、明日、自力で脱出してもらうか、救出に向かうしかない。

「なあ、こんな状況で言うのもアレだけど、今日稼いだDPっていくつなんだ？」

重苦しい空気の中、ヤマブキが切り出した。

「んーと…：四〇八〇DPだね。ランキングは三五〇位。アタシらのパーティが全然狩れなかったらね。ホント、ごめん」

「気にするな、メグさん。まだ一日目だ」

エドガーがフォローを入れる。それに、三五〇位ということは、半分よりも少し上だ。PKを受けた状況にしてはいい方だろう。そう考えた矢先、ヤマブキがちくりと続ける。

「でも明日は、例のボーンナスM o bが現れる日だろう？ こんな状況で狩れなくね？」

ボーンナスM o bが現れるのは、通例でいえば、偶数日。つまり、現れるのは二日目である明日だ。装備を失ったアンドウとメグ、そしてずずとティンバーの危機的状況。

ヤマブキが言うとおりに、明日ボーンナスM o bを狩るのは難しいだろう。

「さて、どうするか」

エドガーはそつとひとりごちる。

一番時間のロスが少ない効率的な方法は、ずずたちに自力で脱出してもらい、エドガー、ウサ、ヤマブキでボーンナスM o bを狩ることだろう。脱出したずずたちは、装備が戻ったアンドウ、メグ

とともに合流すればいい。

だが、もし脱出が失敗してしまったら話は変わる。アンドウとメグを含め、合計四人分の装備が失われることになり、そうなれば、三日目以降の狩りにも影響が出てしまうだろう。

その機会損失は、明日のボーナスMobで得られるDP以上になる。

「……仕方がない」

ため息交じりでエドガーが切り出した。

メグとアンドウは市販装備を購入し、ウサ、ヤマブキの四人でオークのねぐらに行ってもらう。

目的はもちろんDPを稼ぐためだ。つまり、ティンバーとすずを救出に向かうのは自分ひとり。ひとりで瘴気の谷に向い、ふたりを救出する――

それが、エドガーの考えたもつとも安全で確実な方法だった。

サラディン盆地は周囲を山に囲まれたエリアで、地層に含まれる「魔鉱石」が雨水に溶け、侵食された溶食盆地だ。

その魔鉱石はプレイヤーの生産にも活用されている。だが、魔鉱石は水に溶解しやすい特徴を持ち、雨水に溶け込むことで、毒素を持つ危険な濃霧「瘴気」へと変化することが知られている。

瘴気はプレイヤーにとつて、厄介な存在だ。

盆地特有の、風が弱く空気が留まってしまう特徴から、瘴気の谷近辺には「瘴気の溜まり場」が形成される。その「瘴気の溜まり場」に立ち入ってしまうと、持続的ダメージを受けるだけではなく、「毒」の状態異常になり、さらには攻撃命中率を低下させる「盲目」や移動速度を低下させる「鈍化」などを誘発させることがあるのだ。

ゆえにサラディン盆地エリアで狩りを行う際は、状態異常を回復させる魔術【クリアランス】が使える聖職者がパーティに必要だった。

「さて、向かうか」

サラディン盆地エリアの南側、平野を切り裂くようにえぐる亀裂の端に、ひとりのプレイヤーの姿があった。単独ですずとティンバーを救出すべく、瘴気の谷を目指すエドガーだ。

エドガーがそのことを話したのは、学校の昼休み、いつものメンバーですずたちの危機をどう切り抜けるか話し合っていたときだった。

アンデッド系のMobがひしめく瘴気の谷にソロで向かうなんて無謀すぎる、と当事者であるすずは反対した。だが、他に方法が見つからない以上、すずもその案に納得するしかなかった。

『エドガー…ティンバー、すずさん、今からそちらに向かう』

『すず…ごめんね、エドガーくん』

『ティンバー…気をつける、エドガー。毒のダメージはテクニクでどうなるものではない』

『エドガー…心配するな。まだPKがダンジョンに残っているかもしれない。そのままじつと身を潜めていてくれ』

『すず…わかった』

『エドガー…メグさんたちの方は順調か？』

メグたちは予定どおり、DPを稼ぐためにオークのねぐらに向かった。クレッシェンドを出たのは同時だったから、そろそろあの厨房に到着しているくらいだろう。

視界に映る時計を見ながら、エドガーはそう思った。

『メグ…これからアンドウとヤマブキがオークを釣ってくる感じ』

『ウサ…こっちは任せてください！ バリバリ狩りまくりますから！』

『ヤマブキ…問題ないから心配するな』

すぐに返答がくる。アンドウから返答がないのはオークを釣ることに集中しているからだだろう。

『エドガー…しばらく俺もプレイに集中する。チャットに反応できないかもしれないが気にするな』

エドガーは返事を待たずに視界から克蘭チャットウインドウを閉じると、アイテムインベントリを開いた。クレッシェンドの街で購入してきた【回復薬】と【元気薬】、状態異常「毒」を消すアイテム【毒消し薬】に、「盲目」を回復させる【点眼薬】。そして「鈍化」を回復させる【機敏薬】が詰まっている。

最も注意すべきはM o bでもプレイヤーでもなく、テクニクではどうすることもできない状態異常を起こす瘴気だ。もし、瘴気の溜まり場に足を踏み込む場合は、即座に状態異常を回復させる必要がある。状態異常中にM o bやPKに絡まれた場合、不利な状況で戦うことになるからだ。

エドガーは念を押すように自問すると、深く深呼吸し、精神を研ぎ澄ます。

そして、腰に下げた刀の感触を確かめると、瘴気の谷に向け、ゆっくりと崖を下っていった。

エドガーが持つ松明の明かりが、周囲のなめらかな曲線を描く洞窟の輪郭を浮かび上がらせた。

白色や土色にまざり、ぼんやりと翡翠色に輝く魔鉱石は、まるで星空の下にいるような錯覚すらしてしまう。魔鉱石の溶食作用で作られた「瘴気の谷」は、思わず立ち止まってしまふほどの美しさを持つ。だが、エドガーは足をとめることなく、松明の明かりを頼りに慎重に足を進めた。

「茨に棘あり」ということわざが脳裏に浮かぶ。この美しいダンジョンには、油断すれば瞬く間にホームハウス送りにされる危険に満ちているのだ。

ここは一時期かなりお世話になった「狩場」だった。アンデッドや死霊系のM o bは防御力が低いものが多く、単発火力を武器とする物理攻撃特化職の侍にとつて、これほど戦いやすい狩場はないものが多い。

「うっ……」

突如ツンと突き刺さるような刺激臭が、エドガーの鼻腔を襲った。「瘴気」の臭いだ。

瘴気の溜まり場に近づいたことを感じたエドガーは、松明の明かりを消し、暗闇に目を慣らす。

エドガーが明かりを消したのは、明かりにM o bが近寄ってくる可能性があるからだ。瘴気だけに注意して、近づいてくるM o bに気がつかなかった、なんてことになれば目も当てられない。

しばらくの時を費やし、次第に周囲の闇にエドガーの目が慣れていく。

そして、エドガーの前方数メートル。瘴気の溜まり場にくつかの人影が見えた。ここで死んだ人間が瘴気にあてられモンスター化したM o b、グールだ。

迂回すれば抜けることができそうだが、迂回路にも瘴気が滞留している可能性はある。時間の口を避けるためにも、このまま進むのがベスト。

「行けるか」

そう判断したエドガーは、ゆっくりと動き出した。

鯉口を切りながら、無音で闇の中へと身を預ける。

一步。

エドガーはまだ刀を抜かない。

ツン、と脳天を貫くような刺激臭が危険を知らせる。

もう一步。

グールとの距離は五メートルほど。瘴気の溜まり場ぎりぎりの場所だ。

足が止まる。

右足を踏みしめ、同時に身をかがめ、刹那、抜刀――

闇の中に刃紋が走る。

だが、その刃が向かったのはグールではない。しっかりと握りしめた刀の柄は弧を描き、エドガーのすぐ脇、翡翠色に輝く壁面へと叩きつけられた。

「……!?!」

衝撃が空気を震わせ、一匹のグールがこちらへ視線を向けた。

「こっちだ」

瘴気の溜まり場から距離を置くように、エドガーが背後へ跳躍する。

その姿を追い、グールが動き出した。

エドガーの狙いは、彼らを瘴気の溜まり場から、一匹ずつ引きずり出すことだった。

アンデッド系M o bであるグールには、二つの特徴がある。

ひとつは、視認範囲が異様に狭いことだ。グールは音や光に反応して襲いかかってくるアクティブ属性のM o bだが、その範囲が他のM o bと比べても極端に狭い。

ゆえに、グールは「釣りやすい」部類に属するM o bだった。

そしてもうひとつの特徴が、トロールに似た圧倒的な自己治癒力を持っていることだ。

M o bはプレイヤー同様、体力とスタミナが自然治癒していくが、グールはその自然治癒のスピードが極端に速い。その速さは、攻撃の手を休めてしまうとあっという間に体力が全回復してしまうほどだった。ゆえに、グールは一匹ずつ確実に処理していくのがセオリー。

特に、状態異常を受けてしまう瘴気の中で戦うなど、愚の骨頂なのだ。

「ほら、こっちだぞ」

もう一度、エドガーが壁面を殴りつける。

その音におびき寄せられるように、グールはふらふらとエドガーのもとへ向かった。ゆらゆらと揺れるグールの形が、次第にはっきりとしていく。

そろそろか、とエドガーは身構えた。

【円月斬り】で動きを止めて【袈裟斬り】から【斬り込み】にキャンセルで繋げれば片付けられるだろう。ひゅん、と大きく刀を横になぎ払う。【中段構え】の【円月斬り】の発動モーションだ。

そして、くるりと身を翻し、全身のバネと遠心力を使って【円月斬り】を放つ――

「ッ!?」

突如、閃光がエドガーを襲った。刹那、轟く爆音。

業火が吹き荒れ、その衝撃でまるで紙細工のようにグールたちが吹き飛ぶ。

咄嗟に【地走り】を発動させ、背後へと距離を置くエドガーだったが、地を這う炎から完全に逃れることはできなかった。

「くっ……!」

体力ゲージが三分の一ほど削られてしまったのがわかった。

だが、エドガーは突然起きた爆発に戸惑いつつも、即座に体勢を立て直す。

その爆発の原因が何なのか、エドガーにはもうわかっていた。

前方、瘴気の溜まり場があった場所に、いくつかオブジェクト化されたアイテムが転がっている。

あれは魔鉱石だ。爆発は瘴気を固形化させる過程で発生する化学変化だった。

つまり、突然炎を噴き出し、大きく爆ぜたのは瘴気。

瘴気を固形化させるために必要なのは、魔術師の【炎系】魔術だ。

「誰だ」

エドガーが闇に問う。じつと精神を研ぎ澄まし、暗闇の中に潜む敵を探る。かすかに影が動いたのが見えた。そして、鎧がきしむ音も。

「……あれっ?」

背後から突如放たれたのは、幼い少年の声だった。

エドガーは咄嗟に踵を返し、声が放たれた方向へ刀を向ける。

「こいつってもしかして?」

「フン、かもしれないな」

今度は前方から、少年とは別の声が放たれた。

「へえ。あたしらって運がいいねえ」

さらにもうひとり、女性の声が闇に響く。

深い暗闇の中から染み出るように現れたのは、三人のプレイヤーだった。

目つきの悪い金髪の小柄な少年に、髭を蓄えた筋骨たくましい男。そして、赤い短髪で蛇のような鋭い目をした女性。

「あんたらは」

じり、と詰め寄る三人のプレイヤーに、エドガーが警戒の色を強める。

彼らが放つ空気は明らかに友好的なものではなかった。

その目に携えているのは、わかりやすいほどの、敵意。

立ち読みサンプル
はここまで

エドガーはステータス画面に表示されたそれを見て、彼らが何者なのか理解できた。赤く血の色に染まった三人の名前――

こいつらが、すずたちを襲ったレッドネームだ。

「俺に何か用か？」

突如現れた三人のレッドネームに、エドガーは挑発するように言い放つ。

「いや、何って……ねえ？」

クスクスと忍び笑いを浮かべる、金髪の少年プレイヤー、名前はイブキ。

その黄金に輝く頭髮と、身の丈に合っていない大柄な黒いローブが印象的な魔術師だ。現実世界でもそれくらい年齢なのはわからないが、雰囲気から察するに、それほど年齢は高くないだろう。

「見てわからんか」

そう続けたのは、屈強な中年の男。ハルク、という名前のクラス侍のプレイヤーだ。

その名前に勝るとも劣らない、筋骨隆々の体つきと血を好む武士のような佇まい。射抜くような鋭い瞳は、PVPが三度の飯より好きだと物語っている。

「なあ、あんた、件の月歩使いだろ？」

そして、レイチエルという名の女戦士が、どこか気だるそうに訊ねてきた。

華奢な体つきではあるものの、蛇のような鋭い視線からは、並々ならぬ暴力を感じる。

「僕たち、クランマスターから言われてKODに参加してるんだけど、つまらないMob狩りでうんざりしててさ。ココで手当たり次第にPK仕掛けてたんだよね。でも……」

「こんなところで会えるとは思わなかった。ひと目でわかったぞ『もうひとりの月歩使』」

口角を釣り上げ、冷酷な笑みを浮かべるイブキとは対照的に、無表情のままハルクが語る。

その言葉で、エドガーは瞬時に理解した。

レッドネームたちが、あるうことか、あの「侍狩り」だということに。

「あんた滅茶苦茶強いんだよな？　ここであたしとヤろうぜ？」

「何のことを言っているのか全くわからない。それに生憎、あなたたちと遊んでいる時間はない」
サディスティックな笑みをにじませるレイチエルに、エドガーが冷ややかに返す。

「しらばっくれるかあ。でもさ、『ばれちゃしようがねえ』って反応するより、ソッチの方が信憑性あるよね」

イブキがケラケラと笑いながら武器を構える。

「あ、でも本当に月歩使いなら、逃げようなんて考えないかな？」

「ごちゃごちゃうるせえんだよ、イブキ。簡単にイッチまったら偽者。そうじゃなかったら本者……そういうことだろ」

「手合わせ願おう。貴様にその気はなくても、我らにはあるのぞな」

ハルクが、背中へ背負った大ぶりの刀を抜く。エドガーの刀よりも一回り以上大きな刀。取り回しが悪く、攻撃速度が低下してしまうものの、一発の火力が高い両手刀だ。

レッドネームたちは、むき出しの敵意を収めるつもりはないらしい。

エドガーがちらりと背後を見やる。彼らに背を向けて逃げれば、切り抜けられなくもないだろう。